

世界諸言語における語順の地理的および系統的分布に関する研究

課題番号 09610529

平成9年度～平成11年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書

平成12年3月

研究代表者 山本秀樹
(弘前大学人文学部助教授)

研究組織

研究代表者： 山 本 秀 樹 (弘前大学人文学部助教授)

研究経費

平成 9 年度	7 0 0 千円
平成 1 0 年度	4 0 0 千円
平成 1 1 年度	4 0 0 千円
計	1, 5 0 0 千円

研究発表

(1) 学会誌等

山本秀樹 「世界諸言語における語順の地理的分布の変遷」 『一般言語学論叢』第1号、1998年10月31日

Yamamoto, Hideki. 'A Survey of Areal Distribution of Word Order around the World.' *Sprachtypologie und Universalienforschung* vol. 52. June, 1999

山本秀樹 「世界言語類型地図－語順から見た言語類型地理」 『言語類型地理論シンポジウム論文集(仮題)』2000年3月(印刷中)

(2) 口頭発表

山本秀樹 「語順の地理的分布の変遷について」 日本言語学会第117回大会、1998年11月1日

山本秀樹 「世界言語類型地図－語順から見た言語類型地理」 言語類型地理論シンポジウム、1999年12月21日

0. はじめに

本稿は、平成9年度から11年度にかけて行われた文部省科学研究費補助金による、筆者の研究の成果をまとめたものである。この間、種々の語順特徴に関してデータを収集し、約3,000言語（正確には2,930言語）にまで語順データを拡大することができた。また、それと同時に、収集した語順データを系統別に分類し、主として各国別、あるいは、さらに国の内部を数葉に分けた詳細な語順地図を作成していった。ただし、地図に関しては、一部の地域について語順分布図を作成していないが、本研究の程度まで作成すれば、全体の語順分布を把握するには、十分であろう。なお、今後、さらに今回の研究をより大きな著作にまとめる際には、その他の地域の語順分布図も、必要に応じて補足していく予定である。いずれにせよ、今回の研究によって、語順データ、系統別語順分布表、語順分布図のいずれにおいても、世界で群を抜いて最大規模のものを作成するという当初の目的は、十分達せられたものと思われる。

以下、本稿では、本研究期間中に発表した数本の論文の内容を基に、今回の研究で得られた知見を記し、作成した系統別分布表と語順分布図を巻末に添えることで、科研費研究成果報告書としたい。

1. 本研究によって得られた知見

言語普遍性研究と密接に結びついた近年の語順類型論研究は、Greenberg (1963) による先駆的な研究以来、真の言語普遍性を見出すために、特にそのサンプリングの段階において、地理的、系統的な偏りを避けることを原則にしてきた。そのため、一度、そのような偏りのないデータを作成してしまえば、その後は、多くの場合、サンプル中の各言語が、そもそも、どの地域で話され、どの系統に属するのかといった、地理的、歴史的要因を捨象した状態で、主として、その統計的な偏りの方に注目しつつ、言語内部的な観点から研究されてきた。こうした研究方法は、特に人類言語の普遍的特性を見出す目的のためには、確かに有効なアプローチの仕方であり、当然のことながら、そうした研究自体の重要性を否定すべきものではない。

しかし、本稿で以下に見ていくように、語順というのは、きわめて、地理的または歴史的な要因に影響されやすい現象である。そのため、特に語順のような現象については、従来のように、サンプリングによって地理的、歴史的な要因を排除するよりもむしろ、各言語の地理的ないし歴史的な要因を積極的に考慮しつつ研究していく方が、世界諸言語における語順というものの全体像をより正確に捉えることが可能になるものと思われる。そこで、本研究では、あえて言語資料のサンプリングをすることはせず、収集できる限りの多くの言語について語順データを抽出し、その地理的および系統的な分布を考察していくことにした。その結果、本研究によって得られた知見は、主として、次の二点にまとめられる。

まず、単に統計的な言語数の割合だけで見ている限りは、いわゆる整合的語順類型の例外となる言語が多すぎることになり、語順の整合性という概念そのものが、一見、人類言語にとって大して意義のないもののように見えてしまう。しかし、実際に、できる限り多くの言語について語順データを集めた上で、語順の分布図を作成して地理的分布を見てみれば、整合的語順類型の重要性は一目瞭然となってくる。すなわち、不整合な語順類型というのは、種々の不整合的類型すべてを合わせれば、確かに数の上では多数を占めることになっても、そのいずれか一つのタイプだけで、地球上に広いまとまりを成して存在する地域は、どこにも見出されない。それに対して、整合的語順類型は、地球上に非常に大きなまとまりを持って存在することが、本論文末にあげた世界語順分布地図から明瞭に見て取れる。具体的には、整合的 VO 型が、アフリカ大陸の北部および赤道以南の大半のほか、東南アジアを包含しつつ、オーストラリアとニューギニア以外のオセアニア地域に広がっている。一方、整合的ないし準整合的 OV 型は、インド亜大陸から、日本列島を含めてユーラシア大陸北部の大半、アメリカ大陸の大部分、オーストラリア、ニューギニアで、大きなまとまりを成している。なお、準整合的 OV 型とは、形容詞を後置すること以外は整合的な OV 型のことを筆者が便宜上そう読んだものだが、これは、整合的 OV 型と全く別個のタイプというよりは、その下位類ないし亜種として扱うことにする。いずれにしても、種々の語順類型のうち、2つないし3つの整合的語順類型のみが、地球上で大きな連続的まとまりを成して存在し、その他の不整合な語順類型というのは、いずれか一つのタイプだけで地理的に大きなまとまりを成すことはなく、以下に本稿でも検証するように、言語接触や通時的変化といった、地理的ないし歴史的な要因を負いながら、しばしば推移的に存在するものである。

本研究によって明らかになった第二の点は、過去における SOV 型語順の優勢という点である。本論文末の世界語順分布図から見て取れるように、共時的

に見れば、現在、整合的 VO 型と(準)整合的 OV 型とが、ほぼ同等に地球上に広い連続体を成して存在している。しかし、現在話されている言語、および記録の残っている過去の言語を基に、その語順を遡れる限り遡っていくと、かつて地球上の大部分の地域が、SOV 型語順で占められていた可能性が最も高いと考えられる。なお、OV 型の中には OVS や OSV も論理上含まれるが、これらはきわめて稀なので、本稿において、単に OV 型と言った場合、実質的には SOV 型と同義に使われていることに注意されたい。

以下、本稿では、上の 2 つの点について、それぞれ、第 2 節、第 3 節でその概略を論じていくが、より詳しくは、本研究中に筆者が発表した論文、特に Yamamoto (1999) や山本 (1998) を参照されたい。また、本研究は、今後、より大きな著作にまとめていく予定もあるので、いずれまた、その中で詳細を論じていきたいと考えている。

2. 地域別に見た世界諸言語の語順の地理的分布

この節では、具体的に、語順分布を各地域ごとに考察していくことを通じて、上で述べた第一の点について検証する。

2.1 印欧諸語地域

印欧語は、西はアイスランドから東は中央アジア、インド亜大陸まで広く分布しているが、語順に関しては、大きくヨーロッパとアジアで異なっている。

まず、ヨーロッパでは、北西部の島嶼ケルト語と西部のロマンス諸語が、それぞれ整合的 VSO 型、整合的 SVO 型を取り、また、南部においても、アルバニア語が整合的 SVO 型、現代ギリシャ語が整合的 SVO 型に近い(形容詞は前後両方ある)語順を持っている。現代ヨーロッパの印欧語を全体的に見れば、これら北西部から西部および南部にかけて整合的 VO 型が存在し、それらとアジアの印欧語に挟まれた地域の印欧語は、SVO、PR といった語順特徴を共有しつつ、種々の不整合性を含んだ VO 型の言語が分布している。

それに対し、アジアでは、インド・アーリア諸語が、南アジアにおける他の諸言語と共に、整合的 SOV 型語順のまとまりを形成している。また、ヨーロッパの印欧語とインド・アーリア諸語との中間に位置するイラン語派の言語は、概して、現代ペルシャ語やクルド語などの西部では、SOV の節語順を持ちつつも VO 的な名詞句語順を持つのに対し、オセット語のような北部およびバルーチ語やパシュトー語といった東部では、整合的 OV 型の語順を持っている。つまり、イラン諸語は、OV 的なチュルク、コーカサス、インド・アーリア諸

語と、VO的なヨーロッパの印欧語やセム語との間に挟まれた地理的位置を反映するような語順分布を見せている。いずれにせよ、アジアにおいては、インド・アーリア諸語や東部のイラン諸語を中心にOV型が優勢とすることができる。

以上のように、現代印欧語の語順分布を地理的に見ると、アジアではOV型が優勢なのに対し、ヨーロッパでは、種々の不整合を包含しつつもVO的な語順が優勢である。しかし、後で見るように、印欧祖語の語順は、語順の柔軟性を持ちつつも、基本的にはOV型の語順を取っていた可能性が最も高いものと考えられる。そして、インド・アーリア諸語は、元来緩やかなOV型であった印欧語が、特にドラビダとの接触でOV的な性格をさらに強化したものと見られる。つまり、印欧語全体を地理的に見れば、元来OV型語順を持っていたものが、最も東方の南アジアで整合的OV型の言語圏を形成したのと対照的に、ヨーロッパでは徐々にVO的語順に変化し、最も西方域を中心に整合的VO型地域が形成され、それらの中間域において不整合的な語順分布が存在すると概括できる。

2.2 ウラル諸語地域

ウラル語族は、スカンジナビア半島の北部および東部から西シベリアにまで分布する。比較的その安定性が高いことからしばしば系統証明の決め手ともされる音韻、基礎語彙、形態といった側面に関しては割合均質的で、語族内部の系統関係も明白である。しかし、比較的变化しやすい語順のような統語的な側面に関しては、VO的なヨーロッパとOV的なアジアの両方にまたがる地理的位置を反映するように、それほど均質的ではない。

ウラル語の中で最も東方に位置するネネツ語、エネツ語等のサモエド語派の言語やオビ・ウゴル諸語は整合的OV型を持つ。それに対し、西の方に位置するフィンランド語、サーミ語、エストニア語などは、概ね、SVO、PO/pr、GN、AN、NR/m、SA/AS (S=比較の基準 A=形容詞)、AUXVのような、OV型とVO型の混合した語順を取る。そして、地理的にこれらの中間に位置するウラル語は、たとえばコミ語 (SOV/SVO、PO、GN、AN、RN/NR、SA、VAUX)のように、より少ない度合いでVO的語順が混成したような語順を見せる。

このように、ウラル語は、東方では整合的OV型だが、西方に行くほどVO的な語順の混成がより多く見られる。こうした語順の変異は、ウラル語の地理的な位置を見ることにより理解される。すなわち、元来、整合的なウラル祖語が、西方では、ヨーロッパの印欧語におけるVO的語順への変化の影響を受け

て VO 的な語順が混成するようになった結果、現在、ウラル語は、西方の現代ヨーロッパの VO 的語順地域と、東方のアルタイ諸語や旧シベリア諸語の OV 的語順地域との推移地帯を形成するようになったと考えるのが、最も自然な解釈であろう。

2.3 アルタイ諸語地域

アルタイ語族は、チュルク語派、モンゴル語派、ツングース語派を包括し、これら 3 語派間の系統関係はそれほど明確でない。しかし、語順に関してはきわめて均質的で、全体にほぼ整合的 SOV 型で共通している。これは、先程のウラル語族が、語族内部の系統関係が密であるにも関わらず、地理的にはアジアにまたがりつつも相当部分がヨーロッパに位置するために、一部に VO 的な語順が混成しているのに対し、アルタイ語族は、大部分アジアの内部に位置しているという地理的な事実にも一因であろう。唯一の例外はヨーロッパのバルカン半島で話されるガガウズ語で、SVO、PO、GN、AN、NR のように VO 的語順の混成が見られるが、これには、周辺のヨーロッパ語、特にスラヴ語からの影響が考えられる。

いずれにしても、アルタイ諸語は、周囲の言語との接触等で小さな変異はあるとしても、全体的に、トルコからアジア北部にかけて広大な整合的 SOV 型の言語域を形成している。

2.4 南アジア

南アジアには、南部にドラビダ諸語、北部にインド・アーリア諸語、さらにその北部中央より北東部にかけてチベット・ビルマ諸語、北西部にイラン諸語が存在し、また、インド国内の北東部からバングラデシュにかけてオーストロアジア語族のムンダ諸語が分布している。

この地域は、たとえば音韻面に関しても、南アジア北部で鼻母音を共有し、南アジア全域でそり舌子音を共有する等、系統の違いを超えて、長期間の言語接触によって共通の特徴を持つようになる、いわゆる言語連合 (Sprachbund) を成している。語順に関しても、南アジア全域で同様な言語連合が見られる。すなわち、かつては北部まで話されていたと考えられるドラビダ諸語が整合的 OV 型を持ち、先に印欧語について見たように、それとの接触を通じて、インド・アーリア諸語が整合的 OV 型の性格を強化した。また、この地域のイラン諸語も、整合的 OV 型である。チベット・ビルマ諸語は、形容詞の語順については必ずしも名詞の前に置く言語ばかりではないが、全体的に整合的ないし準

整合的 OV 型と言える。特に注目すべきはオーストロアジア語族のムンダ諸語で、これは、同じ語族に属しながら、整合的 SVO 型を取る東南アジアのモン・クメール諸語と対照的に、整合的 SOV 型を示している。

このように、この地域は、系統の違いを超えて、非常に整合的（一部に準整合的）な SOV 型言語連合の大きなまとまりを成している。

2.5 東アジア

東アジアに広がるシナ諸語には、北方方言を母体とした標準中国語、いわゆる普通話に代表されるように、VO 的語順特徴と OV 的語順特徴とが混在している。このような語順の特異性は、シナ諸語全体を地理的、歴史的に位置づけることによって理解される。すなわち、橋本 (1978) の研究によって知られるように、シナ諸語の語順は、歴史的には時代を下るにつれて、また、地理的には南から北に向かうにつれて、OV 的語順特徴がより多く存在するという、推移的な語順変異が見られる。

このように、シナ諸語は、北方に整合的 OV 型のアルタイ諸語、旧シベリア諸語、南方に整合的 VO 型の東南アジアの諸言語という非常に対照的な語順地域の間において、長期間の接触をしてきた結果、南から北に向かうにつれて連続的に VO 的語順から OV 的語順へと変異を示す推移地帯を形成するものと考えられる。

2.6 東南アジア

東南アジアは、細かく見れば種々の系統の言語が錯綜して分布する面もあるが、全体的に概括すれば、中央部にタイ系諸語、東部にモン・クメール諸語、南部にオーストロネシア系の言語が分布し、いずれも比較的明確に整合的な SVO 型の語順を共有している。中国南部からインドシナにかけて分布するミャオ・ヤオ諸語も、概して整合的 SVO 型だが、ヤオ語では、指示詞、数詞などは前置修飾である。また、モン・クメール諸語は、上述のように、オーストロアジア語族ながら、インドにおいて整合的 SOV 型を取るムンダ諸語と、語順の点で著しい対照を成している。他方、西部のチベット・ビルマ諸語は、整合的ないし準整合的 OV 型語順を取って、さらに西方のインド亜大陸における SOV 型言語圏へと連なる。ただし、このうち、ビルマ南部からタイにかけて、すなわちチベット・ビルマ諸語の中では比較的東方に分布するカレン諸語は、SVO、PR、GN、NA、NR のように、むしろ VO 的な語順を取るが、これには周辺のタイ諸語からの影響が考えられる。

つまり、東南アジアは、西部を除いて全体的に整合的 SVO 型語順の言語圏を形成しており、これは、北方では、不整合ながら種々の SVO 的特徴を持つシナ諸語と連続し、南方では、整合的 VO 型語順を持つオーストロネシア諸語へと連続している。さらに、西部では、整合的ないし準整合的 OV 型のチベット・ビルマ諸語が、整合的 OV 型の南アジアへと連なっている。

2.7 オーストロネシア諸語地域

オーストロネシア語族は、北は台湾、ハワイから南はニュージーランド、西はマダガスカルから東はイースター島に至るまで、地球を約 3 分の 2 周するほどの広域に分布している。しかし、ユーラシア大陸南東部から海洋に乗り出して拡散した時期が、特にここ 5,000 年の間と見られるため、言語としての同質性が比較的高く、語順に関しても、後述する一部の例外を除いて、整合的 VO 型語順を共有している。ただし、節語順に関しては、SVO 語順の言語と、VSO や VOS といった動詞初頭語順の言語が存在する。しかし、これらの分布には、ある程度地理的なまとまりが見られ、前者は、主にマレー半島からメラネシアにかけて分布し、後者は、台湾、フィリピンから、ポリネシアといった地域に分布している。つまり、ユーラシア大陸南東部から拡散したものと見れば、概ね、SVO 語順は中心部に多く、動詞初頭語順は比較的周辺部に多いとすることができる。ちなみに、冒頭で言及した周辺地域の言語、すなわち、台湾の高砂諸語、ハワイ諸島のハワイ語、ニュージーランドのマオリ語、マダガスカルのマラガシ語、イースター島のラパヌイ語は、いずれも動詞初頭の基本語順を持っている。

例外として言及を要するのは、ニューギニア島の海岸部およびその周辺部で話されるオーストロネシア諸語の一部に、SOV ないし OV 的な語順が見られる点だが、これについては、崎山 (1986) 等の研究で、先住のパプア諸語との言語接触による語順変化が指摘されている。

いずれにせよ、オーストロネシア語族は、ニューギニアおよびオーストラリアを除く広大なオセアニア地域において、整合的 VO 型語順の大きなまとまりを形成している。

2.8 オーストラリアおよびニューギニア

オーストラリア先住民諸語は、しばしば自由語順の言語の例にあげられるように、かなり語順を自由に変えられる言語も少なくないため、基本語順の認定が難しい面もある。しかし、基本語順の知られる限りで見れば、一般的に、

SOV型で形容詞だけは後置される、いわゆる準整合的SOV型が大半を占めると言ってもよいであろう。

ニューギニアのパプア諸語も、基本的に準整合的SOV型を持つ。ただし、上のオーストロネシア諸語の節で見たように、ニューギニア島沿岸地域および周辺の島々のオーストロネシア諸語の一部にSOV的な語順が見られるのと呼応するように、パプア諸語においても、西パプア諸語、トリチェリ諸語、東パプア諸語等の中に、SVOやVO的な語順パターンを持つ言語が一部存在する。これは、オーストロネシア諸語とパプア諸語との言語接触による変異と考えられる。

このように、オーストラリア、ニューギニアのいずれも、基本的には、準整合的SOV型の言語圏を形成していると概括できる。

2.9 アフリカ大陸

アフリカ大陸には、北からアフロアジア語族、ナイル・サハラ語族、ニジェール・コンゴ語族、コイサン語族の4つの語族が存在するが、このうち、アフロ・アジア語族は、セム語派が中東地域にも及んでいるため、中東のセム語も含めて論じることにする。

アフロアジア語族は、中東からアフリカ北部にかけて分布し、エジプト、セム、ベルベル、チャド、クシ、オモの6つの語派からなるが、最後のオモについては、西クシ諸語としてクシ語派に属させるか議論の分かれるところである。この、アフロアジア語族に顕著な点としては、全般的に見れば概ねVO型語順のまとまりを成している点や、多くの言語において古い時代のVSO節語順からの離脱が見られるといった点であろう。たとえば、古代エジプト語は、整合的VSO型であったが、後のコプト語はSVO型を取る。また、聖書ヘブル語、古代アラム語、古典アラビア語、ゲエズ語等の古い時代のセム語は、一般に整合的VSO型の言語が多い。しかし、現代ヘブル語、現代アラム語、現代の口語アラビア語諸方言の多くでは、VO型語順パターンを保ちつつ、節語順はSVOになっている。また、エチオピアのセム諸語は、古典エチオピア語とも呼ばれるゲエズ語と対照的に、先住のクシ諸語の影響でSOV的な語順パターンに変化してきているものが多い。古いセム語でも、アッカド語は、基本的にはPR、NG、NA、NRのようにVOパターンを取りつつも、SOVの節語順を持つが、これは、先住のシュメール語（SOV、PO、NG、NA、NR）との接触によるものと考えられている。また、クシ諸語およびオモ諸語は、基本的には整合的SOV型であるが、上述したエチオピアのセム諸語や南部のバンツー諸語との言語接触を通じて、言語類型地理的に興味深い語順の推移が見られる。すなわ

ち、エチオピア北部では、セム諸語がクシ諸語との接触により VSO 型から SOV 型に変化してきており、エチオピア南部では、おそらくバンツー諸語からの影響で一部のクシ諸語が SOV 型から SVO 的な語順に変化してきている。残るチャド語派およびベルベル語派については、少数の例外を除いて、それぞれ、整合的 SVO 型と整合的 VSO 型の語順を持ち、語派内部の語順にそれほど変異が見られない。

ナイル・サハラ語族は、系統的にそれほど密ではなく、地理的にも南北をニジェール・コンゴ語族とアフロアジア語族という大語族に挟まれた地域において、東西に帯状に分布して話されている。この語族は、こうした系統的、地理的な位置づけを反映するかのようになり、VSO、SVO、SOV といった様々な型の語順を包含し、アフリカの語族の中で最も多様な語順を持ち、語族としての語順を一般化することは困難である。

ニジェール・コンゴ語族は、西アフリカから赤道南部の大半を覆う地域で話されているが、語順に関しては、全体的に整合的 SVO 型語順が優勢で、現在、この地域において広大な SVO 型の言語域を成している。ただし、特に西アフリカにおいて、語順の変異が見られる。すなわち、バンツー諸語を包含し、赤道以南の大半を占めるベヌエ・コンゴ諸語、およびその北で話されるアダマワ・ウバンギ諸語は、概して整合的 SVO 型語順を取る。ニジェール・コンゴ語族中最も西方に位置するアトランティック諸語もまた、整合的 SVO 型語順を持っている。そして、ベヌエ・コンゴ諸語およびアダマワ・ウバンギ諸語と、アトランティック諸語との中間に位置する言語には、VO 型と OV 型の混成が見られる。まず、西部のマンデ諸語およびドゴン諸語は、SOV、PO、GN、NA のような語順を取る。さらに、それらと、ベヌエ・コンゴ、アダマワ・ウバンギとの中間地域では、ちょうどバンツウ的な SVO 型が中央から西に向かって波及するかのようになり、クワ、グル、クル諸語の中に、SVO、PO、GN、NA といった語順が見られる。ただし、こうした後置詞使用や所有者前置の言語においても、形容詞、関係節、数詞といった修飾要素は名詞の後ろに置かれる言語が一般的であることから、ニジェール・コンゴ語族全般としては、やはり VO 的な語順が優勢と言えよう。

コイサン語族は、4,000 年ないし 3,000 年前に始まるニジェール・コンゴ語族の拡大以前は、アフリカ南部のかなり広い地域で話されていたと見られているが、現在は、タンザニアにサンダウェ語およびハツァ語が残存することを除けば、アフリカ南西部に分布するのみである。語族内部の語順に関してはそれほど均質的ではなく、まず、中央コイサン諸語は整合的 SOV 型語順を持つ。北部コイサン諸語は SVO、PO、GN で、その他の修飾要素が一般に後置されるが、南部コイサン諸語には、この語順を持つ言語と整合的 SOV 型の言語とが

ある。地理的に見ても、これらの VO 的な語順の混成には、周囲のバンツー諸語からの影響が考えられるだろう。なお、タンザニアのサンダウェ語およびハヅア語については、前者は準整合的 SOV 型を取り、後者は概ね整合的 VSO 型を取るが、後者については、周辺のナイル系言語、特にマサイ語からの影響が指摘されている (Wald 1994, 294)。

以上のように、現在のアフリカ大陸は、全体としては、東南アジア、ヨーロッパと並んで、SVO 型ないし SVO 語順の優勢な地域と言える。ただし、多数の言語がひしめくアフリカ大陸の語順はそれほど単純ではなく、中央部では、ナイル・サハラ語族を中心に種々の語順が存在し、東アフリカと西アフリカでは、OV 型と VO 型との地理的な語順の推移が見られる。

2.10 アメリカ大陸

アメリカ大陸先住民諸語は、いわゆる多総合的ないし抱合的な言語も多く、基本語順の設定し難い面も少なくない。しかし、基本語順のわかる限りで見れば、アメリカ大陸は、全体的に SOV 型語順が優勢とすることができる。

ただし、微視的に見ていけば、広大なアメリカ大陸の内部には、語順の差異も見られる。たとえば、類型論研究においてよく知られるように、アマゾン川流域の言語には、OVS や OSV と行った稀少な語順の言語も少数ながら存在する。また、モース語族として総称されることもある、セイリッシュ、ワカシュ、チマクムといった、北西太平洋沿岸地域の言語群は、整合的 VSO 型語順を取り、また、中米には、SVO や動詞初頭語順の言語が多数存在する。

つまり、アメリカ大陸全体を巨視的に見れば、北西太平洋沿岸地域と中米を除いて、南北アメリカ大陸とも、整合的ないし準整合的 SOV 型の大きな連続地帯を形成していると概括できるだろう。

2.11 その他の地域

上で扱わなかった言語として、まず、ピレネー山脈西北部でフランスとスペインにまたがって話されている、系統不詳の孤立語であるバスク語から見る。これは、印欧語族の拡散以前からの言語で、古くから印欧語との違いが注目を引いてきたが、語順に関しても、周囲の印欧語が全般に VO 的な語順に変化してきた中であって、準整合的 SOV 型語順を保っている。

カスピ海と黒海の間のコカサス諸語も、印欧語拡大以前からこの地域で話されていた言語だが、概して整合的な SOV 型語順を取る。たとえば、南コカサス諸語は一般に整合的 SOV 型を持ち、北西コカサス諸語は準整合的

SOV型を持つ。また、北東コーカサス諸語は、フバルシ語やアルチ語等のように修飾要素を前置しながらSVO語順と前置詞を持つ言語もあるが、やはり大部分が整合的SOV型語順を持つ。したがって、コーカサス諸語の本来の基本語順はSOV型で、一部の言語が、周辺の印欧語からの影響でVO的な語順を混成させてきた可能性が考えられるだろう。

シベリアからアメリカ大陸北部さらにグリーンランドに及ぶエスキモー・アレウト諸語も含め、アジア北部で話されている言語の中で、ウラル語族にもアルタイ語族にも属さない言語は、しばしば、旧シベリア諸語として包括されている。これらの言語のうち、ユカギル語、ギリヤーク語、ケット語といった孤立語はいずれも、整合的なSOV型を持つ。また、チュクチ・カムチャッカ語族は、一部に、たとえばイテルメン語（SVO/sov、PR、GN、AN）のようにVO的な特徴を混成させた言語も存在するが、概して整合的SOV型を持つ。すなわち、旧シベリア諸語は、ユーラシア大陸北部において、アルタイ諸語や東部のウラル諸語と共に、広大なSOV型の言語圏を形成していると言える。また、エスキモー・アレウト諸語は、アメリカ大陸北部の多くの言語と同様、一般に準整合的SOV型を持っている。

最後に、朝鮮語、アイヌ語、日本語も、地理的にユーラシア大陸北部から連なる位置にあって、こうした地域の言語と同様、整合的SOV型語順を取っている。

3. 過去における語順分布

これまで見てきたように、整合的VO型と(準)整合的OV型が、それぞれ連続した大きな地理的まとまりを成して存在し、しかも、これらは、現在ほぼ同等に地球上を分け合って分布している。しかし、この分布も、現在の言語および記録の残っている言語により通時的に遡れる限り遡っていくと、VO型語順を持つ地域というのはきわめて限られており、かつては、地球上の大部分の地域がOV型、すなわち実質上SOV型の言語で占められていた可能性が最も高いものと思われる。

3.1 地域別の検証

この節では、上で見た分布を参照しつつ、地域ごとに語順の地理的分布を遡って考察していくことを通じて、第1節で述べた第二の論点、すなわち、古くは、多くの地域がSOV型語順で占められていた可能性にたどり着くことを検証していく。

3.1.1 印欧、ウラル諸語地域から西アジア

印欧語は、先に見たように、アジアでは、インド・アリア諸語や東部のイラン諸語を中心に、整合的 SOV 型語順が優勢である。他方、ヨーロッパでは、島嶼ケルト語（cf. かつてヨーロッパの広い地域を覆っていた大陸ケルト語は SOV）が整合的 VSO 型を取り、ロマンス諸語やアルバニア語が整合的 SVO 型を取る以外は、種々の不整合性を持ちながらも、全般的に SVO 的な語順が優勢である。しかし、現代ヨーロッパの印欧語も、たとえば、ロマンス諸語と古典ラテン語、現代ギリシャ語と古代ギリシャ語、現代英語と古英語、現代ドイツ語と古高地ドイツ語等の間で語順を比較してみれば明らかのように、一般に、時代を遡るほど、OV 的特徴がより多く見られる。また、記録に残る最古の印欧語であるヒッタイト語も、整合的 OV 型語順を持つ。このようなことから、印欧祖語の語順は、古い印欧語によく見られるように語順の柔軟性はかなり持っていたであろうが、やはり、Lehmann (1974) や松本 (1975) 等が指摘するように、基本的には SOV 型の語順を取っていた可能性が最も高いものと思われる。

ウラル諸語は、東部では整合的 OV 型語順を持つのに対し、西部では OV 型と VO 型の混合した語順が見られる。これらのウラル諸語の中に、整合的 SOV 型の言語は実際に存在するのに対し、整合的 SVO 型の言語は存在せず、また歴史的にも検証されていない。また、OV 型の分布する地域は、アルタイ諸語による OV 型の連続体に近い地域であり、OV 型と VO 型の混成した語順を持つ地域は、OV 型から VO 的な語順に推移しつつある印欧語圏内である。こうしたことから、ウラル語の語順は、やはり遡れば、元来 SOV 型であった可能性が高いと考えられる。ただし、小泉 (1994, 257-62) でも指摘されているように、ウラル祖語の場合も、SOV 型を基調としながら、その語順の自由度は高かった可能性があるだろう。

西アジアでは、トルコ語を除けば、大部分イラン系かセム系の言語が話されている。トルコ語はもちろん、整合的 SOV 型の言語である。イラン諸語は、整合的 OV 型の言語のほか、特に西イラン諸語の中に混合型の語順も見られるが、元をただせば、結局 SOV 型語順を持っていたと見られる印欧語である。残るセム諸語が、現在、西アジアで整合的な VO 型の地域を形成している主要な言語群である。しかし、このセム語を包含するアフロアジア祖語は、元来はアフリカ大陸のサハラ地方で話されており、その後、セム語が、7,000 年前から 6,500 年前にかけて西アジアに移動したものと考えられている。したがって、現在、西アジアに広がる VO 語順の大部分はセム語に起因しているが、そのセム語自体は、北アフリカから後代に西アジアに移住して、特にアラム語、アラ

ビア語等を通して拡大していったものであると考えられる。つまり、現在の西アジアの VO 型語順は、後に北アフリカからの連続で現れてきたものであって、西アジアに本来存在した語順とは、必ずしも言えなくなってくる。実際、シュメール語は、名詞句の修飾・限定要素の語順は VO 的であるが、後置詞を持つ SOV 言語で、後来のアッカド語の節語順を SOV に変えてしまうほどであった。このように、西アジアも、少なくともセム語が入ってくる以前は、むしろ SOV 語順が優勢であった可能性は十分考えられる。

その他、これらの地域で話されている言語として、バスク語やコーカサス諸語があるが、前者は準整合的 SOV 型で、後者は、一部に VO 的な語順もあるが、概して整合的 SOV 型である。前述のように、コーカサス諸語の VO 的語順の混成には周辺のヨーロッパ語からの影響が考えられるので、コーカサス諸語の本来の語順は、基本的に SOV 型であった可能性が高いだろう。バスク語もコーカサス諸語も印欧語が拡大する以前から話されていたと見られていることから、これらの語順もまた、古い時代における SOV 型語順の優勢を示唆するものと言えるだろう。

また、これらの地域で、エトルリア語、ウラルトゥ語、エラム語、フルリ語等、古代に死滅した系統不詳の言語が、いくつか知られている。これらの古い言語も、語順の知られる限り、少なくとも節語順に関しては、SOV の基本語順を持っていたものが大部分である。

したがって、このヨーロッパから西アジアにかけての地域は、現在はむしろ VO 型が優勢だが、VO 的語順の拡散は、西アジアにおけるセム語の拡大、ヨーロッパの印欧語における VO 的語順への変化や、それと地域的に接した西のウラル語の VO 的語順の混成等による、比較的后代の現象であって、古くは、SOV 型が大勢を占めていた可能性が高いものと思われる。

3.1.2 アルタイ、旧シベリア諸語地域および南アジア

これらの地域は、現在でも SOV 型語順が優勢な地域であるが、古くから SOV 型の言語圏を形成してきたものと考えられる。

アルタイ諸語は、大半がアジアに存在することを反映するかのようになり、ガガウズ語をほとんど唯一の例外として、齊一的に整合的 SOV 型語順を共有する。ガガウズ語に関しては、前述したように、VO 的言語に囲まれたバルカン半島において周辺の言語から影響を受けて、VO 的語順が混成したものと考えられる。また、詳細に見れば、たとえば、トルコ語においても、ペルシャ語の影響で、名詞の後ろに置く関係節も存在する。しかし、このような語順は、いずれも、周辺の言語からの影響で、アルタイ語族本来の語順ではない。したがって、

アルタイ語の語順は、元来、やはり整合的 SOV 型であったものと思われる。

旧シベリア諸語は、前述したイテルメン語のように VO 的な語順が一部に混成した言語も見られるが、全体的には SOV 型が大半を占める。これらは、アルタイ系の話者が拡大する以前、北東シベリアの広範な地域に分布していたと見られるが、今日の記録に残る言語で見ると、それらの歴史、地理的分布から考えて、一部の言語に見られる VO 的語順の混成にはロシア語からの影響が考えられるので、やはり、全体的に、古くから SOV 型の語順を取っていた可能性が高いと見てよいであろう。また、朝鮮半島および日本列島は、地理的には東アジアに入れられることが多いが、語順に関しては、朝鮮語、アイヌ語、日本語、琉球語とも、古くから、アルタイ諸語、旧シベリア諸語と共に整合的 SOV 型の言語連合を成していたものと考えられる。

南アジアは、ドラビダ諸語、ムンダ諸語、チベット・ビルマ諸語、インド諸語、この地域のイラン諸語とも、長い歴史を通じて、全体的に、SOV 型の言語連合を形成してきた。

3.1.3 東アジアおよび東南アジアからオセアニア

これらの地域は、先に見たように、現在は概して VO 的な語順が支配的である。しかしながら、通時的に遡っていけば、やはりこれらの地域でさえも、古くは、むしろ SOV 的な語順の方が優勢であった可能性が考えられる。

まず、シナ諸語については、前述したように、時代を下るにつれて、特に北方で OV 的特徴が増してきたと見られてきた。しかし、Li and Thompson (1974) によると、さらに長い歴史の中で見れば、元来は SOV 型で、そこから SVO 的な方向に向かい、その後、再び OV 的な語順に向かっていったという可能性が考えられる。さらに、西田 (1989a, 185; 1989b, 816-18) や DeLancey (1987, 806-809) 等によって、シナ・チベット語族全体の祖語は、本来、SOV 型であったとも言われてきている。たとえば、西田によると、概略、シナ・チベット祖語は、S O s-V-o のような構造を取っていた。チベット・ビルマ諸語は、このような構造から、動詞の人称標示を消失したり、格標識を発達させたりしながら、派生していった。他方、シナ諸語、タイ諸語、ミャオ・ヤオ諸語の語順は、この動詞部分のような配列順から発達したということである。ただし、記録に残る範囲で中国語だけを見る限りは、いくら遡っても整合的 SOV 型を取っていた段階は見られない。したがって、中国語は、文字記録の現れた段階では、既に VO 的な方向に向かっており、さらに後に、特に北部を中心に、アルタイ諸語の影響などを受けつつ、再び OV 的な特徴が備わっていったものと思われる。いずれにしても、シナ・チベット語族が、元来 SOV 型であったとすれば、東

アジアおよび東南アジアにおいて今日 SVO 型ないしそれに近い語順を持つ言語の相当部分が、結局 SOV 型語順に遡るという可能性が出てくる。つまり、今日これらの地域に広く見られる SVO 的語順は、大部分、後の発達であって、本来のものではないことになる。

オーストロアジア語族は、インド北東部のムンダ諸語が整合的 SOV 型を持つのに対し、インドシナ半島東部を中心に分布するモン・クメール諸語は整合的 SVO 型を取る。モン・クメール諸語は、特にヴェト・ムオン諸語など、周辺のタイ諸語やシナ諸語の影響をかなり受けた局面も存在することは事実である。しかしながら、アッサム地方に分布するモン・クメール系の言語もまた整合的 SVO 型語順を持つことや、言語内部的にもかつての VO 型の配列順を示唆する面も見られることから、三上 (1992, 390) や Lehamann (1973, 57) 等が指摘するように、オーストロアジア祖語の語順は、むしろ SVO 型であった可能性が高いようである。

オーストロネシア語族は、ニューギニア周辺において一部 SOV 的語順が見られるものの、前述したように、これには周辺のパプア諸語との言語接触が指摘されており、オーストロネシア祖語の語順は、その節語順が動詞初頭か SVO かという問題はさておいても、やはり VO 型であったと考えられる。ただ、このオーストロネシア語族が、ユーラシア大陸南東部からオセアニア地域に拡散したのは、せいぜい 5,000 年前に遡る、人類言語史上、比較的最近の出来事とすることができる。それらの拡大した地域には、それ以前、オーストラロイド系の人々が住んでいたと言われる島々もあるが、東部は大部分無人島であった。先住のオーストラロイド系の人々の言語は不明だが、語順については、後述のパプア諸語およびオーストラリア諸語から推定する限り、SOV 型であった可能性が考えられる。また、無人島地域については、当然オーストロネシア系の言語が最初の言語ということになる。つまり、オセアニアにおいて VO 型語順地域が拡大したのは、比較的近年になってからオーストロネシア系の言語が拡散した結果であって、本来のものではないと言えよう。

パプア諸語の大部分は準整合的 OV 型語順を持つが、前に見たように、SVO や VO 的な語順パターンを持つ言語も一部に存在する。しかし、これらの言語は、いずれもオーストロネシア諸語との接触があった海岸部に限られ、一般に、ニューギニア島の内部には、こうした語順変異は認められないことから、やはり、パプア諸語本来の語順は、整合的ないし準整合的 SOV 型であった可能性が高いと考えられる。また、オーストラリア諸語も、準整合的 SOV 型を基本語順に持つ言語が多く、特に語順変化したと見る根拠はないようなので、やはり、元来、整合的ないし準整合的 SOV 型の語順を取っていたものと思われる。

以上見てきたように、東アジアおよび東南アジアからオセアニアにかけて地

域において VO 型の祖語を持っていたと想定されるのは、オーストロアジアとオーストロネシア、すなわち狭義のオーストリックである。おそらく、これらが、源郷と見られるユーラシア大陸南東部において、比較的早くから VO 型語順を発達させたのであろう。しかしながら、やはり同様の地域に源郷を持つと言われるパプア諸語およびオーストラリア諸語が、いずれも準整合的 SOV 型を持つことから、このユーラシア大陸南東部でさえも、古くはむしろ SOV 型が大勢を占めていた可能性が考えられるだろう。

3.1.4 アフリカ大陸

アフロアジア語族については、シュメール語との接触でアッカド語が SOV の節語順を持ち、クシ、オモ諸語およびこれらとの接触により一部のエチオピアのセム語が SOV 的語順を示すことを除けば、アフリカ北部から西アジアにかけて、VO 型語順が大勢を占めている。そして、アフロアジア祖語の語順は、推測の域を出ないようだが、VO 型、さらに言えば VSO 型であったと考えられている (Newman 1987, 708; Heine 1976, 62)。ただ、節語順に関しては、先に見たように、多くの言語において、古い VSO 語順を消失していく傾向が見られる。アフロアジア祖語は、西アジアの所でもふれたように、元来サハラ地方に源郷を持つと見られ、この北アフリカの地において、記録に残る範囲では世界でも最も早期から VO 型語順を持つようになり、それが、その後、セム語を通じて、西アジアにも拡大していったと考えられる。ただし、アフロアジア語族の占める面積は、かつては次に述べるナイル・サハラ語族と、アフリカ北部をほぼ同等に分ち合う程度で、早期から現在ほど広域を占めていたわけではなかったようである。

現在のナイル・サハラ語族は、アフロアジア語族とニジェール・コンゴ語族の間に挟まれた、帯状の比較的狭い地域で話されているが、上述のように、かつては、北アフリカを、アフロアジア諸語と二分していたと見られる。同語族は、先に見たように、現在、SOV、SVO、VSO といった、種々の語順の言語を包含し、ナイル・サハラ祖語の語順を推定することは困難であるが、最近、SOV 型であったとする説が出てきている (Bender 1997, 55-56)。

ニジェール・コンゴ語族は、特に赤道以南において、整合的 SVO 型の広大な地理的まとまりを形成している。しかし、その祖語の語順に関しては、やはり、Givón (1975) や Hyman (1975) が想定したように、SOV 型であったという説が有力になりつつある。また、現在は赤道以南の大半を整合的 SVO 型語順で占めるバンツー諸語も、元来は西アフリカの一隅に位置していたもので、サハラ砂漠の拡大に伴い、4,000 年ないし 3,000 年前から広がり始め、11 世紀頃ま

でに現在のような広域を占めるようになったものである。よって、この地域における VO 型語順の拡散は、比較的近年になってからの事象と見ることができるだろう。

コイサン語族は、先に見たように、中央コイサン諸語が整合的 SOV 型なのに対し、北部コイサン諸語および南部コイサンの諸語の一部に、SVO 的な語順の混成が見られる。このような地理的位置から考えても、後者の混成的語順には周辺のバンツー諸語からの影響が考えられ、また、タンザニアのサンダウエ語の VSO 型語順についてはマサイ語からの影響が指摘されているので、コイサン諸語の語順は、元来 SOV 型であった可能性が高いだろう。なお、Heine (1976, 63) も、最良の推測と断りながら、SOV 型をコイサン祖語の語順と見ている。また、地理的、歴史的に見て、コイサン語族は、上述のバンツー拡大以前は、より広い地域を覆っていたと考えられていることから、かつては、この SOV 型語順が赤道以南の広域を覆っていた可能性が高い。

以上のように、アフリカの 4 大語族のうち、ナイル・サハラ語族、ニジェール・コンゴ語族、コイサン語族の祖語が SOV 型であったと見られ、また、ナイル・サハラ語族およびコイサン語族がかつてはより広域を占めており、現在の赤道以南における SVO 型語順の広がりも、比較的近年の移動の結果であると思われる。こうしたことから、現在では VO 型語順が支配的なアフリカ大陸についても、かつては SOV 型語順が、現在よりはるかに広い分布を持っていたという可能性は、十分考えることができるだろう。

3.1.5 アメリカ大陸

アメリカ大陸は、上述のように、VSO 型を取る北西太平洋岸地域と、SVO や動詞初頭語順を持つ中米を除けば、大陸全体に、整合的ないし準整合的 SOV 型の言語が大半を占めている。このように、SOV 型語順が支配的であることから考えると、その他の語順は、アメリカ大陸に本来存在したものではなく、むしろ後の改新によって生じてきたという可能性が高いように思われる。

実際のところ、上述の 2 つの例外的地域についても、改新の可能性が考えられる。たとえば、北西太平洋岸のモース諸語は、多総合的な構造を持ち、元来は SOV としてもかなり自由な語順から、後に VSO 的な語順を取るようになった可能性がある。種々の文明が盛衰し、様々な言語が錯綜する中米についても、Yasugi (1995, 107-32) の中で、複数の語族において SOV 型からの変化が指摘されており、また、近年ではスペイン語からの影響も見られる。さらに、中米に限らず、アメリカ大陸の種々の語族について SOV 型の祖語を再建している研究が、しばしば見出される。

元来、アメリカ大陸先住民諸語は、ユーラシア大陸東北部から、複数の移住の波があったにせよ、およそ2万年ないし1万年数千年前に、当時は陸橋を成していたベーリングシアを通過して入ってきたものと考えられている。そこで、その究極的な源郷であるユーラシア大陸東北部の言語を顧みれば、既に見たように、古くはSOV型が大勢を占めていたと思われる。この点からもやはり、アメリカ大陸先住民諸語の元来の語順は、SOV型であった可能性が最も高いと言えよう。

3.2 言語蝟集

今日大きな広がりを持つ大語族は、大部分、新石器時代に入ってから、先住の諸言語をのみ込みつつ、拡大してきたものであって、それ以前は、互いの系統付けの困難な種々の言語が蝟集していた可能性が高い。しかしながら、語順に関しては、種々雑多な語順が密集していたという状況は、ほとんどなかったのではないかと思われる。

これについては、むろん直接的検証は不可能であるが、いくつか、そう推定べき根拠は存在する。まず、今日言語が蝟集している、または、近年までそうであったと思われる地域の語順分布を見てみると、旧シベリア諸語地域、コーカサス、ニューギニア、オーストラリアの特に北部、アメリカ大陸といった、多くの地域において、語順に関しては概ね斉一的で、SOV型語順を共有している。また、語順、特に整合的語順というのは、その地理的分布から明らかのように、最も言語連合を成しやすい特性の一つとすることができる。しかも、これまで見たように、現在記録の残る言語から遡っていくと、世界の多くの言語がSOV型語順にたどり着く。

以上のことを総合すれば、たとえ大語族が拡散する以前は種々の言語が蝟集する状況が常態であったとしても、やはり、かつては地球上の大部分の地域をSOV型言語が占めていた可能性が最も高いものと思われる。

3.3. 過去におけるSOV型語順の優勢に対する理由づけ

以上、考察してきたように、古くはSOV型語順が地球上の大半を占めていたとすれば、そこには何らかの理由が存在するはずである。ただし、OV型とVO型という全体的語順類型そのものには、今日の地理的分布、統計的偏り、構造内部的な一貫性から見て、特に優位差は存在しないように思われる。そこで、ここでの理由づけは、主に節語順の違いに求められるであろう。事実、節語順については、本稿末の世界語順分布図の中に記載したように、今日の統計

でも大きな差が見られる。

まず、原型的な他動的動作の展開のあり方を考えると、動作主が引き起こした動作が後に被動者に及ぶ。そこで、動作の始点では動作主の方が顕著に認識され、動作が終点に近づくにつれて被動者の顕著さが増すと考えられる。これを、言語の上でも類像的に表現すれば、しばしば動作主と相関する主語が、しばしば被動者と相関する目的語の前に現れるので、主語が目的語に先行する語順の方が、その逆の語順よりも、自然な基本語順としては現れやすいと考えられる。また、主語が話題 (topic) になりやすい傾向があることから、結果的に主語が文頭に立ちやすいと考えられる。さらに、Tomlin (1986) が Verb-Object Bonding という原理として述べているように、一般に、主語よりも目的語の方が動詞との結びつきが強いことから、目的語と動詞が隣接して現れやすい。

以上のことから、自然に現れやすい基本語順の候補として残るのは、SOV および SVO ということになる。しかし、近年の類型論やピジン・クレオール研究などによつて、SVO 語順というのは、特に言語接触等を通じ、広域にわたつて、多数の非母語話者にとり入れられたような場合において現れやすいと言ふことが、しばしば指摘されている (たとえば Lehmann 1992, 249)。ところが、今日の大語族が拡大を始める新石器時代に入る以前は、当時の生活状況から考えて、ある特定の言語が、他の言語と急速な接触を起こしつつ、広域に広がるようなことは、ほとんどなく、種々の言語が、緩やかな収束と分岐を繰り返しつつ、蝟集していたと考えられる。そこで、古い時代には、SVO が生じる可能性も低かったと思われる。

よつて、比較的自由度が高かったと思われる古い時代に最も自然に現れやすい基本的な節語順として残るのは、結局 SOV 語順ということになり、さらに配列上の整合性という、人類言語の持つ一般的性質によつて、結果的に、SOV 型語順が大勢を占める結果になったのではないかと思われる。

4. まとめ

以上見てきたように、人類言語の語順特徴は、地理的ないし系統的な観点から見れば、やはり整合的語順類型というものがきわめて重要な位置を占め、それらが地理的、系統的に大きなまとまりを成して存在している。それに対して、種々の不整合的語順類型は、たとえ、すべてを合わせれば数の上で多数を占めたとしても、単一のタイプで大きな地理的まとまりを成すことはなく、地理的な言語接触ないし歴史的な語順類型の推移といった要因を負いながら、大きな整合的語順類型のまとまりの周辺に、しばしば連続的に推移しながら存在しているものである。

また、現在、整合的 OV 型と整合的 VO 型は、それぞれ大きなまとまりを成して、地球上にほぼ同等に分布しているが、現在の言語および記録に残る言語から通時的に遡れる限り遡っていけば、古い時代には、VO 型を持つ地域というのはきわめて限られており、SOV 型語順が地球上の大半を占めていた可能性が最も高い。現在は広域を占めている VO 型語順は、大部分、大語族の拡散が始まった新石器時代以降に、しばしば語順の改新を伴いつつ、その拡散に従って広がってきたものと考えられる。

【謝辞】

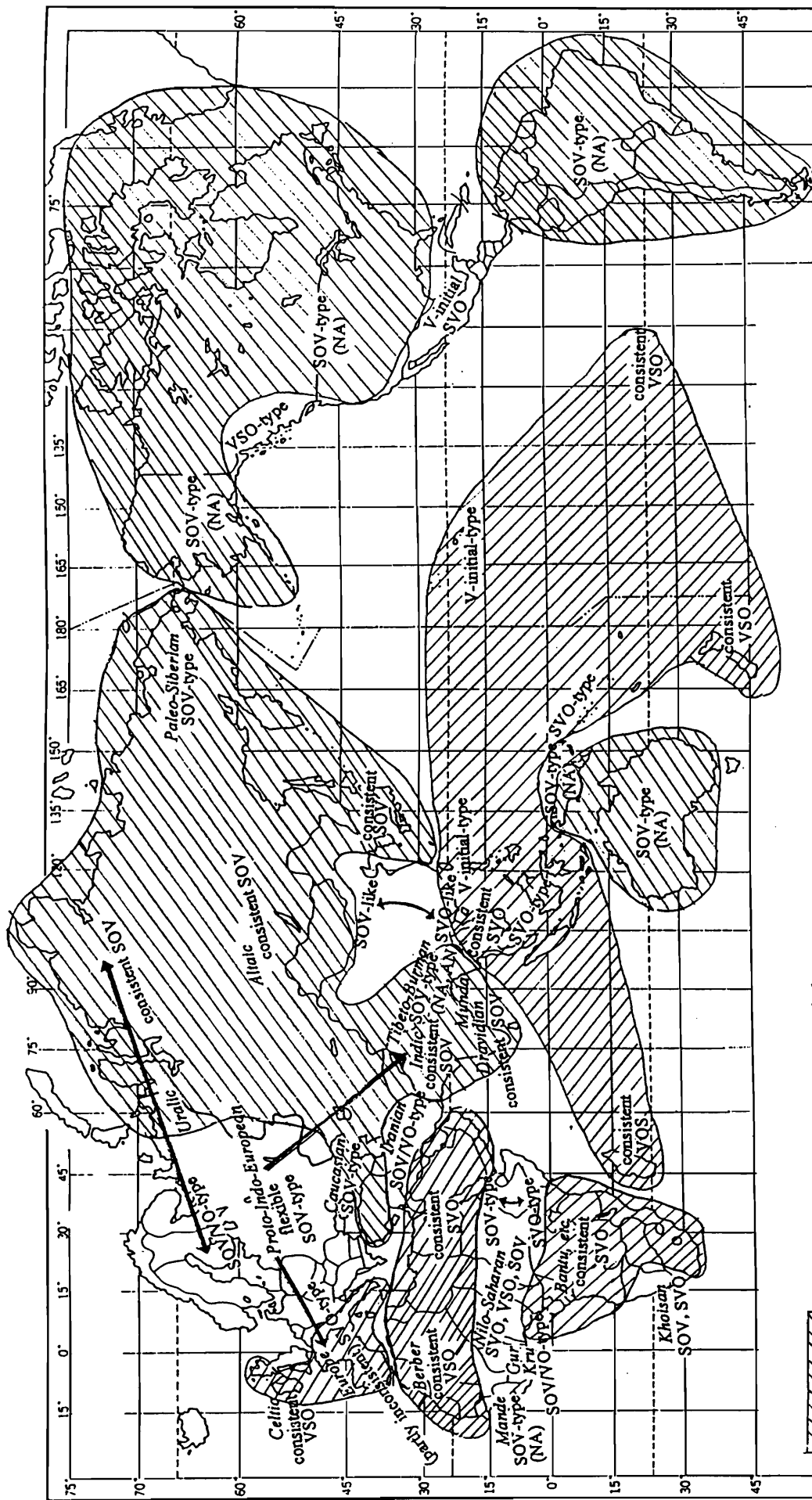
本研究期間中、特に、筆者が書いた論文に対するコメント等を通して、種々の貴重な御助言を下された松本克己先生、柴谷方良先生、バーナード・コムリー先生に、衷心より謝意を表す。

【参考文献】

この種の研究では、当然のことながら膨大な文献の恩恵に浴しているが、ここでは、本報告書の中で実際に言及したものに限ることとする。

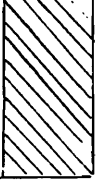
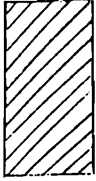
- Bender, Lionel M. 1997. *The Nilo-Saharan Languages*. 2nd ed. München: Lincom Europa.
- Comrie, Bernard, ed. 1987. *The World's Major Languages*. London: Croom Helm.
- DeLancey, Scott. 1987. 'Sino-Tibetan Languages.' Comrie (ed.), 797-810.
- Givón, Talmy. 1975. 'Serial Verbs and Syntactic Change: Niger-Congo.' Li(ed.), 47-112.
- Greenberg, Joseph H. 1963. 'Some Universals of Grammar with Particular Reference to the Order of Meaningful Elements.' *Universals of Languages*. Ed. Joseph H. Greenberg. Cambridge, MA: MIT Press (2nd ed., 1966), 73-113.
- 橋本萬太郎 1978 『言語類型地理論』 弘文堂
- Heine, Bernd. 1976. *A Typology of African Languages Based on the Order of Meaningful Elements*. Berlin: Dietrich Reimer Verlag.
- Hyman, Larry M. 1975. 'On the Change from SOV to SVO: Evidence from Niger-Congo.' Li (ed.), 113-48.
- 小泉保 1994 『ウラル語統語論』 大学書林
- Lehmann, Winfred P. 1973. 'Structural Principle of Language and Its Implication.' *Language* 49: 47-66.

- , 1974. *Proto-Indo-European Syntax*. Austin: University of Texas Press.
- , 1992. *Historical Linguistics*. 3rd ed. London: Routledge.
- Li, Charles N., ed. 1975. *Word Order and Word Order Change*. Austin: University of Texas Press.
- , and Sandra A. Thompson. 1974. 'Historical Change of Word Order: A Case Study in Chinese and Its Implications.' *Historical Linguistics, Vol. 1*. Eds. J. M. Anderson, and C. Jones. Amsterdam: North-Holland Publishing Company, 199-217.
- 松本克己 1975 「印欧語における統語構造の変遷：比較・類型論的考察」『言語研究』第68号，15-43頁
- 三上直光 1992 「ムンダー諸語」『言語学大辞典第2巻』三省堂，388-91頁
- Newman, Paul. 1987. 'Hausa and Chadic Languages.' Comrie (ed.), 705-23.
- 西田龍雄 1989a 「シナ・チベット語族」『言語学大辞典第2巻』三省堂，167-87頁
- 1989b 「チベット・ビルマ語派」『言語学大辞典第2巻』三省堂，791-822頁
- 崎山理 1986 「オーストロネシア語族とパプア諸語の言語接触：とくに語順変化について」『国立民族学博物館研究報告』第11号-2，355-82頁
- Tomlin, Russel S. 1986. *Basic Word Order: Functional Principles*. London: Croom Helm.
- Wald, Benji. 1994. 'Sub-Saharan Africa.' *Atlas of the World's Languages*. Eds. Christopher Moseley and R. E. Asher. London: Routledge, 289-309.
- 山本秀樹 1998 「世界諸言語における語順の地理的分布の変遷」『一般言語学論叢』第1号，49-72頁
- Yamamoto, Hideki. 1999. 'A Survey of Areal Distribution of Word Order around the World.' *Sprachtypologie und Universalienforschung* 52: 64-77.
- Yasugi, Yoshio. 1995. *Native Middle American Languages: An Areal-Typological Perspective*. *Senri Ethnological Studies* 39. Osaka: National Museum of Ethnology.



* Percentage of languages with respect to order in clauses

SOV=48%	SVO=38%	VSO=10%
VOS=3%	OVS=0.8%	OSV=0.5%

-  Continuous areas generally occupied by consistent or subconsistent OV-type
-  Continuous areas generally occupied by consistent VO-type

Areal Distribution of Word Order

Hideki Yamamoto 'A Survey of Areal Distribution of Word Order around the World' *Sprachtypologie und Universalienforschung* 52 (1999) 1-7